

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔A〕

誰でもおそらく中学生、高校生の頃に「自分」を発見する。と同時に、その反対側にある「世界」と出会う。自分を包み込んでいくもっと大きな世界。自分がその中で生きていく社会環境としての世界。あるいは人によっては自然環境としての世界かもしれない。いずれにせよ、中学生、高校生の頃に、「自分」のまわりには「世界」というものがあるのだ、という感触を初めて本当に知ることになるのだと思う。それまでは生まれ育った「家」に守られていて、自分が無防備な状態で世界に直面しているという実感はない。自分を発見すること。世界と出会うこと。この二つは表裏一体の出来事だ。世界と出会うことによって改めて自分を発見しなおす、と言ってもよい。

「世界と出会う」とは、もう少し詳しく言うと「自分にとって手も足も出ないような、人間のスケールを超えた、ある大きな力と出会う」ことだ。そういう経験がきつと皆さんにもあると思う。またなにか、人によって違うだろうが、それに会える瞬間は必ず訪れるにちがいない。

1、自分の狭い殻に閉じこもっている、そういう機会が訪れても気づくことができない。だから、自分をバリアで囲い込むのではなく、何か大きな力と出会う機会に向けて、常に自分を開いてほしい。

「自分」はつねに「世界」のさまざまな波打ち際と接している。その波打ち際はいつも近くにある。それに向けて自分を開いておく。

開く勇氣を持つ。

たしかに、大きな津波が来たらどうするのか。逃げられないではないか。とすると「世界の波打ち際に向けて自分を開く」のは一見、□のように思えるかもしれない。

でも、そうではない。

東日本大震災の大津波では、防波堤を人工的に築いても役にたたないことがわかった。でもそれはコンクリートの防波堤を超える高さで威力の津波が来たからで、もっと高くして強固な防波堤を築くべきだ、という判断がいまだにある。けれども、②本当にそうだろうか？ そんな教訓でよいのだろうか？

私たちは海という巨大な謎の世界と、自分たちが住んでいる見知った街を、防波堤という境界で分断してしまった。2、バリアを築いて自分たちを囲い込んでしまった。そう考えてみてはどうだろうか。

かつて海辺で暮らしていた人々は、海を通じて世界と対面していた。海の色、潮の匂い、波の音や高さ。これらはすべて情報の※アーカイブだった。それを読み解けば、天候がどんなふうに変化するか、いつ、どのくらいの大きさの波が来るかがわかった。つまり海という巨大な謎の世界からのシグナルをキャッチできた。それは長い時間のなかで知らず知らず身に付いた知恵だ。

ところが、海と人との間に巨大なコンクリートの壁を築いたらどうなるか。そうした自然がもたらす情報は遮断されてしまう。人間が海と対話することができなくなってしまう。天候の変化も、津波の危険性も察知できない。やがて海からのシグナルをキャッチする感受性は失われていく。③人は生きるための大切な知恵の一つを捨ててしまったのだ。

3 皆さんに言いたい。自分を開くのは決して無防備な草ではない。外の世界から発信されているさまざまな信号や情報を全身で受け止める。それは、自然に向けても社会に向けても自己を開放し、対話することなのだ。その行動を恐れてはいけない。

〔B〕

今日は※レヴィーストロースの話をしよう。彼は一九七七年に初めて日本を訪れ、「民族学者の責任」というタイトルで講演した。東京の有楽町のホールへわくわくしながら講演を聴きに行ったことを、まるで昨日のことのように覚えている。

その頃レヴィーストロースは「構造主義」という独自の新しい人類学の理論を打ち立てていた。彼は南北アメリカのインディアン（先住民）の何千にも及ぶ異なった神話をすべて分析・研究して、その神話の中に働いている数学的といってもよい緻密な論理を四巻の分厚い本にまとめた。そのなかで全面的に展開されている思考法が構造主義だ。一九七〇年代レヴィーストロースは構造主義の理論家として知られ、日本でも有名だった。その人が日本にやってきて、難解な構造主義の理論について講演するのかもしれない、非常に興味があった。

④ 難解であれば難解であるほど興味が湧く。それが若さの特権の一つだと思う。難しいことを否定的にとらえてはいけない。易しく読めるものの方が、むしろすでに出来上がった知のくり返しに陥っていることも多い。

わかりやすいことには逆に気をつける。わかりにくいことのほうがはるかにおもしろい。こうした感じ方を、ぜひ大切にしてほしい。わかりやすいことが今、とても安直に求められている傾向が目立つ。でも「わかりやすいこと」は、すでにある、誰もが知っている

情報の※パッケージとして組み立てられているから「わかりやすい」のだ。新しい発想や理論、新しい知識や知恵というものは、まだ情報としてパッケージ化されていない。よくわからないところからモヤモヤとつくりあげていき、あるとき直感のようにして真理を発見する。だから新しいものには、※ネガティブでつまらないことではなく、「わからない」のは、※ポジティブでももしろい未知がかくれているということなのだ。

※当時の僕にとって、レヴィーストロースの構造主義はほとんどわからなかった。読んでも、読んでも理解できない。だからこそおもしろかった。何かヒントになる話をしてくれるだろうと思って講演を聴きに行ったら、なんと「民族学者の責任」というタイトル。ここでは構造主義理論の話はいつさい出ない。レヴィーストロースは、民族学者や人類学者はどのような倫理と責任をもって今の世界に立ち向かっているのか、について情熱的に話した。

先進国はひたすら自分たちの利益と発展のために地球上のありとあらゆるエネルギーや資源、土地を乱暴に開発してきた。それによって先住民族の居住地を狭め、最終的に彼らを文明化させると言いつつ、彼らの多様な言語や音楽、舞踊、神話などの中に込められた知識や知恵を根こそぎ奪い取っていった。

レヴィーストロースはひたすらそんな話をし、文明の奢りにたいして厳しい批判をした。彼は著作では、そうしたことについてあまり述べてはいなかった。にも関わらず、この講演では、民族学者として世界に向きあって仕事をしているときに持つべき深い倫理観と責任について語ったのだ。学問をするのも一人の人間であり、その責任を世界のすべての人々、地域にたいして果たさなければならぬという考えだ。

それを聴いて大きな衝撃を受けた。学問のために学問をするのではない。学問を自己目的化してはいけない。研究者もまた、一人の人間として世界にたいして大きな責任を負っていく営みなのだ、
と思知らされた。

〔C〕

そんな衝撃の中で二六歳のときメキシコへ飛び出した。もっと早くから日本脱出の願望はあったが、当時は今ほど海外へ行くことが簡単ではなかった。さすがにもう一ドル三六〇円の固定相場制の時代ではなかったが、当時はまだ一ドルが二百数十円。海外に長く滞在したり生活するためには、日本円はまだまだ価値が低かった。

山への関心から、さらに発展して人類学へ。そしてロマンティックな人類学を超えて、レヴィ・ストロース的な倫理と責任。近代文明を※是として、資本主義の先進的な生活の中に意味や富や豊かさ[※]を追い求めてきた人類にたいする大きな問い直し。そうした視点から僕は、先住民文化がいまだに豊かに息づくメキシコに出かけて行った。

メキシコでフランスの作家ル・クレジオ(一九四〇〜)と遭遇したことも、僕にとって大きな出会いの一つだ。ル・クレジオは、パナマのインディオに関する傑作『悪魔祓い』(一九七二)を書いた後、メキシコのプレペチャ族のインディオが住む地域で生活し、彼らの古い神話をフランス語に翻訳する仕事をしていた。僕もそのとき、ちようどプレペチャ族の祭りの調査をするために同じ地域に入っていたので、ル・クレジオと会う機会があった。

ル・クレジオは二〇〇八年にノーベル文学賞をとったので今では世界的に有名な作家の一人になったが、僕も当時すでに『悪魔祓い』を読んで、西欧文明の横暴を批判し、インディオの野生の知恵を再

発見しようとするその視点に圧倒的な影響を受けていた。その本人とメキシコで偶然出会ってしまう。こういう奇跡のような偶然も、人生にはあるものだ。

⑤ 僕がメキシコへ行って、インディオの中で自分と世界との関係をもう一度はかり直してみようと思立った、その大本のところはル・クレジオの著書『悪魔祓い』があることには薄々気づいていた。その著者本人と、同じメキシコのフィールドで出会うことになることは夢にも思わなかった。自分がメキシコに来たことは間違っていないかつと確信した。

⑥ ル・クレジオはインディオの世界を西洋文明に対置して捉えていた。失われた原始的、野性的な生活としてインディオの世界を※ノスタルジックに美化するのではなく、人類が近代化する過程で捨て去ったもう一つの生き方の可能性として考えていた。それは今まで私たちが歩いてきたのとは違う道であり、考え方であり、近代科学とは異なる、もう一つ別の科学^⑦知なのではないか。

⑦ レヴィ・ストロースも神話を分析しながら、そこにもう一つの科学的思考があることを突き止めた。それを彼はThe science of the concrete —— 「具体の科学」と呼ぶ。抽象的な概念によってできた科学ではなく、具体物によってできた科学。インディアンは周囲にある動植物、昆虫や蜜、あるいは何かを燃やした後に残る灰、といった具体物を使って世界を理解する考え方を非常に緻密に構築した。西洋近代の天文学や地質学と同じような体系をもちながらも、近代科学とは全く別の科学を、具体物をめぐる考え方によって築き上げた。たとえば、食べ物が生か、火が通っているか、あるいは腐っているか、発酵しているかといった違いを、人間の日常的な思考法のような領域にあてはめて考えていくようなやり方だ。レヴィ・

ストロースは神話研究によつてそのことを解明してきた。

〔D〕

今、あらゆる情報は断片化され、タグ(分類指標)を付けられ、整理されてメディアから提供される。それはわかりやすくパッケージ化された情報だ。

レヴィーストロースがアメリカインディアンの神話を研究しようとしたとき、目の前にある世界には、なんのタグも付いていなかった。彼は三〇年も四〇年もかけて、過去数世紀の間に連綿と伝承されてきた神話を自分の中に吸収して、それらをすべてもう一度自ら「生き直した」。

神話というのは、一人の人物が鳥になったり、動物になったり、あるいは体が半分に分かれてみたり、また人間に戻ったり、とても不思議なことを繰り返しながら生きていく物語だ。その物語全体をレヴィーストロースはひきうけ、生き直そうとした。情報として分類整理されていない、混とんとした何かを自分なりにとり込んでいく方法は、それしかない。途方もない方法だが、レヴィーストロースの学問はそこからしか生まれてこなかった。

それはパッケージ化された情報を適当にぎして何かをつくり上げるのはまったく違う孤独で困難な作業だ。しかし、そういう作業が少しでも継続的に行われていかない限り、使い古された情報の瓦礫だけが積み重なる世界になってしまうだろう。

僕の専門領域は「文化人類学」ということになっている。これもまた一つのタグにすぎない。※泉靖一の著作に出会ったとき、確かに文化人類学は夢のような学問として目の前にあった。山に登り続けながら学問になるなら、こんなに素晴らしいことはない、と思った。

しかし大学で研究するうち、どんな学問分野でも形式的に与えられたものにすぎない、と強く感じ始めた。一つの学問分野の守備範囲は、大学というシステムの中で、あくまでも便宜的に縦割りで決められたものでしかない。それは、学問そのものの中から内在的にできあがってきた枠組みではなく、その学問分野が大学の中で生き延びるために与えられた枠組みにすぎない。文化人類学に限らず、経済学、政治学、社会学……すべてそうだ。

これから大学に進学して、研究者の道を選ぶ人もいるだろう。そういう皆さんはぜひとも、学問分野が生き延びるために制度の中であてがわれている枠組みなどたいしたものではない、という気構えをどこかでもつていてほしい。

⑧ 殻は破られるためにある。殻を破らず、一つの守備範囲の中でだけ物事を考えているかぎり、そこからは決して真に新しいものは生まれぬ。以前に誰かがやったことの反復でしかない。守備範囲としてあらかじめ与えられた枠組みの中でだけ仕事をしていけば楽ではある。パッケージ化されたわかりやすい情報に依存していれば、深く考える必要もない。しかしそれでは前例のないことはできない。未知を切り拓くこともできない。今の学問も、社会も、少なからずそうした袋小路に陥っている。

皆さんには冒険をしてほしい。わくわくするような未知の世界と出会ってほしい。そのためには殻を破って自ら新しい未来を切り拓くことをおそれないでほしい。誰がなんと言おうと、自分の信ずる道を進む勇気を失わないでほしい。

(今福龍太『何のために「学ぶ」のか(中学生からの大学講義)』

一部改変)

※（文中のことばの意味）

アーカイブ … 古文書・記録文書等の保管所。コンピュータにおいて、記録ファイルをまとめたもの。

レヴィIIストロース … フランスの文化人類学者。

パッケージ … ひとまとめにしたもの。

ネガティブ … 否定的。消極的。

ポジティブ … 肯定的。積極的。

是として … よいものと考えて。

ノスタルジック … 故郷をなつかしむこと。

泉靖一 … 人類学者。東京大学に文化人類学科を創設した。

問3

□□□□にあてはまるものとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア つらいこと、不安なこと

イ 恐ろしいこと、苦しいこと

ウ 怖いこと、危険なこと

エ いやなこと、たえられないこと

問4

線②「本当にそうだろうか？ そんな教訓でよいのだろうか？」とありますが、筆者はどのようなようにするべきだと述べていますか。次の文の□□□□にあてはまる表現を「A」の文中から二十五字でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

人間は

□□□□

べきである。

問1

線①「『大きな力』とは何なのか」とありますが、筆者がいう「大きな力」にあたるものを「A」の文中から四字で二つぬき出しなさい。

問2

1 □ □ 3 □ □
ものを次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ だから ウ なぜなら

エ つまり オ もしも カ しかし

問5

線③「人は生きるための大切な知恵の一つを捨ててしまった」とありますが、人が「捨ててしまった」「生きるための大切な知恵の一つ」とはどのようなものですか。二十～三十字で説明しなさい。句読点なども字数に数えます。

問6

線④「難解であれば難解であるほど興味が湧く」とありますが、筆者がどのように考えたのはなぜですか。その理由を「くから」につながるように「B」の文中から二十字以内でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問7 線⑤「僕がメキシコへ行って、インディオの中で自分

と世界との関係をもう一度はかり直してみよう」とありますが、
どのようなことを「はかり直そう」としたのですか。その内容
を文中のことばをつかって、四十五字以内で説明しなさい。
句読点なども字数に数えます。

問8 線⑥「ル・クレジオ」と線⑦「レヴィー||ストロ

ース」について、二人に共通する科学的思考とはどのようなも
のですか。二十字以内でぬき出しなさい。

問9 線⑧「殻は破られるためにある」とありますが、「殻を

破」ることを通じて、筆者はどのような主張をしていますか。
十〜十五字の簡潔な一文にまとめて答えなさい。句読点なども
字数に数えます。

□ 次の文章はある実業家によるものです。

人には寿命じゅみょうがある。もちろんきみにもだ。夢は追い続け
るかぎり、必ず途切とぎれるもの。それはそれでよし。夢半ば、
夢成じょうじゆ就なり、なのである。夢を追う人は、そのことをよ
く知っている。だから、夢を追う人は、人生を後悔こうかいしない。
夢なくして何が人生か！

(渡邊美樹『きみはなぜ働くか。』)

この文章から読み取れる筆者のメッセージを、五十字以内で書き
なさい。

また、□の文章とこの文章から読み取れる、それぞれの筆者のメ
ッセージの共通点を考え、それに対するあなたの意見を次の条件に
合わせて書きなさい。

条件 : ア 百八十〜二百字で書くこと。

イ 二段構成で書くこと。

ウ 一段落目は二つの文章の共通点を、二段落目には
あなたの意見を書くこと。

これで問題は終わりです。